

人生ハンド仏句

第53号

H.18.8.1
(毎月1日発行)

皆ともに

仏道を成ぜん

住職 谷川寛俊

インドでは春から三ヶ月位も雨季が続き、その間は仏教々団では托鉢もできず、又外出すると草木の若芽を踏んだり、昆虫類を殺す事が多いので、僧院の中で集団生活をして修行に専念したので、それを雨安居(うあんご)とか夏安居(げあんご)といいました。

その修行の終わりが七月十五日で、修行が終わった僧侶に供養したのが盂蘭盆会(うらぼんえ)の始まりです。

お釈迦さまの十大弟子の一人、神通第一といわれた目連尊者、

その母、青提女は物惜しみして自分の者は他人に分け与えず、欲しい物を貪(むさぼ)る慳貪(けんどん)の罪で餓鬼道に落ちていました。

神通力で母を探し出した目連は、母の姿を見て悲しみ大神通で飯食を送り、母が喜んで口に入れると水になって燃え、母の身まで焼けるのを見てあわてて水をかけると、水が薪となって身を焼くありさまです。

自分の神通力では救えないのでお釈迦様に尋ねました。

『汝が母は罪深し。汝一人の力およびべからず。七月十五日に十万の聖僧を集め、百味の飲食(おんじき)を供養し母の苦を救うべし』との教えに従ったので、母は餓鬼道の苦しみから救われました。これが盂蘭盆経で説くお盆の由来です。でも目連が本当に父母を仏にする事ができたのは、自分が法華経に至り南無妙法蓮華経と唱えて仏

編集・発行
玉蓮山 真成 寺
編集部
TEL・FAX (0765)22-2268
メールアドレス
kokorochanthk@ybb.ne.jp
ホームページアドレス
<http://www.geocities.jp/sinijyoujitovama108/>

になった時なのだ、と日蓮聖人は盂蘭盆御書で説かれます。

日本では旧暦の七月十三日から十五日にお盆の行事が行われてきたのですが、新暦になってから、七月や月遅れの八月にしたり、農作業の都合や地域によって、お盆の風習も色々違いがあります。

お盆は亡き家族や先祖の供養だけでなく、餓鬼道に堕ちている無数の霊位の供養を忘れてはいけません。

お盆にあわせてお寺で、施餓鬼法要を営むのはそのためです。この法要に参列しお題目を唱え仏道修行し、法華経の信仰に励む事が大事です。

貪りの心を持っているのが私達です。お題目を唱え、この功德を一切に及ぼし、皆ともに仏道の成就を願うのがお盆の行事です。

愚かな人は できることをせず
できもしないことを望む